

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和二年一月二十五日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 山内麻衣子(金沢能楽美術館学芸員)

狂言 魚説法(うおぜつぽう)

親の追善のためお堂を建立した者が供養に法談を催そうと寺へ住持を訪ねますが、住持はあいにく出掛けています。代わりに応対に出た新発意に来てもらうことにします。お布施欲しさに承諾した新発意はお経を知りません。覚えていた言葉といえ、浜辺育ちで魚の名ばかりです。魚の名を取り集めて談義のように説いて聞かせることにします。「かやうのめでたい(鯛) 御代によも合はび(鮎)」から説き始めて飛魚のように逃げ帰るまで、ひたすら生臭い魚尽くしをキリなく連ねます。さて新発意は魚の名を幾つ、説法に混ぜているか、聞き分けてみましょう。

能 巴(ともしえ)

木曾の山家を出た僧一行(ワキ・ワキツレ)が江州粟津が原の神前で涙を流す女(前シテ)に出会います。女は行教和尚が宇佐八幡に詣でて涙をこぼした故事を引き、この場所には木曾義仲を神と祀ると教えて合掌します。女はさらに僧に一夜の読経を頼み、入相の鐘の響く頃、亡者を名乗って草陰に消え入ります(中入)。その夜、回向する僧の前に甲冑姿の巴(後シテ)が現れ、女の身ゆえ義仲の最期に捨てられた恨みを述べます。自らを武士と心得る巴は生きよとの君命が口惜しく、しかし君命には従って去り、死後も君辺に仕えて主君の成仏を願うのでした。最期の別れを思い出して涙にむせぶ巴は、群がる敵を長刀で切り払い、形見の小袖と肌の守りをいただいて武器を捨て、女姿に変わって木曾へ落ち行く様を再現します。そして巴は、その折の後ろめたさが死後の執心となり、浮かばれない我が身をどうぞお弔いくださいと訴えます。義仲の死因を流れ矢(平家物語)から自害に変え、別れ行く女武者の心の葛藤に光を当てた作品です。

(西村 聡)

前シテ(里女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は小面の面をかける。摺箔を着附に着、その上に唐織を着る。(持物、扇)

後シテ(巴) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、黒垂をつける。梨子打烏帽子をいただき、女増髪又は前後共孫次郎の面をかけ、白鉢巻をしめる。摺箔を着附に着、白大口をはき、腰帯をしめる。上に唐織を壺折に着、太刀をさす。(持物、長刀)

(午後四時三十分頃終了予定)